

● 6月24日(日) 晴 宮城県(女川町、石巻市、南三陸町、気仙沼市)  
岩手県(陸前高田市、大船渡市)

・よほど疲れたのか昨晩は良く寝た。6時起床。

両隣の車は朝早く出かけていったのかもういない。朝食をとっていると、三重からボランティアで来ているというおばさんが声をかけてきた。震災直後からずっとボランティアに来ていて、今年ももうかなりの回数来ている。今回はこのあたりで10日間くらい働くという。小柄だけどファイト溢れるすごいおばさんだ。いろいろとお話を伺い「ここの大川小学校」と陸前高田市の「高田高校」はぜひ訪ねて欲しいと紹介された。「頑張っ！」と写真メッセージをお渡しして激励した。

・8時過ぎ道の駅を出発し、まず「大川小学校」を目指した。静かに悠々として流れる大河・北上川の南岸の県道30号線を東へ向かった。津波はこの北上川を10km近くも逆流して遡り、河岸の地域に大きな被害をもたらした。10分近く走って国道298号線が走る新北上大橋のたもとに出たら、眼下に見るも無残に破壊されてポツンと置かれている建物が目に飛び込んだ。これが、児童、教職員のほとんど、84人もの命が流された宮城県石巻市大川地区の「大川小学校」だ。



悠々として流れる大河・北上川



河原にポツンと取り残された大川小学校

こんなに海から遠く離れた静かな河原に巨大な津波が押し寄せるなんて誰が想像できただろうか？  
鉄筋コンクリート作りの立派な校舎が原型を留めぬほどたたき壊されている。すごい威力だ！



・先生方は高いところに架かっている新北上大橋に生徒を誘導しようとしたという。でも津波の押し寄せる速さが予想以上だった。それに今回の津波の高さからして、新北上大橋もそんなに高くない。学校



奥に見えるのが新北上大橋

のすぐ裏には急斜面ながら山が迫っている。この斜面を登って逃げていけばもっと犠牲が少なくて済んだのにと残念でならない。





じっさいここを登って逃げて助かった子もいたそうだ。学校の前には立派な慰霊碑と祭壇が設けられ、毎日訪れる人が絶えないという。私も周りを何回も回って実情をじっくり観察し、無くなった方々のご冥福を心からお祈りして、後ろ髪を引かれる思いで大川小学校を後にした。



・海岸線を南下して女川地区へ向かった。ここの惨状もひどい。

残っているのは破壊された鉄筋コンクリート作りの建物だけで、木造家屋は皆無。石巻市の瓦礫置き場になっているのか、とにかく瓦礫の山がいたるところに積み上げられている。町役場も流され、高台にプレハブ2階建て庁舎を作って業務をしている。



プレハブ2階建て女川町仮庁舎

・石巻市に入ったら鉄柱に「東日本大震災・津波浸水深ここまで」という標識があった。150cmくらいあるだろうか。タクシーの運転手さんに「ここまでの深さの水が3日間溜まっていた」と聞いて、さぞ大変だったろうと思った。石巻市役所に寄ってご挨拶をしてから国道45号線を北へ向かった。



水がここまで数日間溜まっていた



・南三陸町。

ビルの3階をも飲み込んだ想像を絶する威力をもった津波でとにかく町はすべて流された。現在も鉄骨だけの建物や傾いたり破壊されたままの鉄筋コンクリートの建物だけが残り、流された車は瓦礫として一か所に積み上げられている。その惨状に鳥肌が立った。



・南三陸町、ここにはいろいろなドラマがある。

**ドラマ1・防災対策庁舎（河北新報より）：**

◎津波の第1波の襲来まで庁舎内には約30人の職員がいた。しがし、無事が確認されたのはわずか8人。遠藤副町長もその一人だった。依然行方が分からない職員の多くが防災担当だった。防災無線を使いぎりぎりまで住民に避難を呼び掛けた。屋上に避難してフェンスやアンテナにしがみついたが、津波の力は想像をはるかに超えていた。階段の手すりにしがみついて一命を取り留めた佐藤徳憲総務課長（60）は、第1波の後、多く



鉄骨だけで立つ 防災対策庁舎



の仲間が消えていることに気付いた。「何とも言えない失望感。ただそれだけだった」安否が確認できていない町職員は 30~40 人で、全職員の約 2 割に相当する。これから町を担う 30 代の中堅職員や 10~20 代の若手職員が含まれる。

◎3月11日午後2時46分、宮城県南三陸町の防災対策庁舎2階にある危機管理課。町職員遠藤末希さん(24)は放送室に駆け込み、防災無線のマイクを握った。

「6メートルの津波が予想されます」

「異常な潮の引き方です」「逃げてください」

防災無線が 30 分も続いたころ、津波は庁舎に迫りつつあった。「もう駄目だ。避難しよう」。上司の指示で遠藤さんたちは、一斉に席を離れた。同僚は、遠藤さんが放送室から飛び出す姿を見ている。屋上へ逃げたはずだったが、津波の後、屋上で生存が確認された 10 人の中に遠藤さんはいなかった。南三陸町の住民約 1 万 7700 人のうち、半数近くが避難して命拾いした。遠藤さんは、多くの同僚とともに果たすべき職責を全うした。



### ドラマ2・高野会館 (相川哲弥ブログより) :

◎志津川湾から約300メートルの平地に建つ宮城県南三陸町の総合結婚式場「高野会館」。震災時、利用客や従業員ら約330人は会館にとどまった。「帰したら、津波で危険だ」。避難誘導に当たった従業員らのとっさの判断が、全員の命を救った。

・「生きたかったら残れ」 会館を出ようとロビーに殺到した人だかりが歩みを止めた。階段の前で、従業員らが大きく手を広げ、仁王立ちになって行く手を遮っていた。



「生きたかったら、ここに残れ」。男性の怒鳴り声が響いた。「頑丈なこの会館が崩壊するなら町は全滅する」。同会館営業部長の佐藤由成さん(64)は1988年の開館当初から勤務。設計段階から知り尽くした建物の強度に自信を持っていた。「お年寄りの足では途中で津波に遭遇してしまう」と判断したのは町社会福祉協議会総務課長の猪又隆弘さん(52)。経験と利用客の状況を踏まえ、4階建ての会館にとどまるのが最善と考えた。「このままでは津波にのまれる」。体力のある人がお年寄りを背負った。町社協老人クラブ担当の佐々木真さん(39)は4階への階段を上りながら、背後に津波を感じた。ガチャン、バキバキ。1階の窓ガラスが割れ、2階にもがれきが流れ込んだのが音で分かった。3階を振り返ると、ロビーの窓ガラスを大量の水が突き破った。足元もぬれていた。屋上には既に水が押し寄せていた。水位は膝まである。「ここもだめか」。佐々木さんらは、普段人が入らないエレベーター室や高架水槽などがある会館最上部へ避難誘導を急いだ。(中略)第4波は午後5時32分に襲来。屋上までには到達しなかった。職員らの判断と機転。会館で命拾いしたお年寄りは口をそろえて言う。「よく生きていられた。従業員らの指示に従い会館に残ってよかった」(村上俊、渡辺龍)



・気仙沼市に着いた。

ここもご多聞にもれず被害がひどい。何しろ町の真ん中に大型漁船が鎮座している。気仙沼は地震、津波に加えて火災が発生してとんでもない恐怖に襲われた町だ。



町の真ん中に大型漁船がまだある

・宮城県の県境を越えてとうとう岩手県に入った。このあたりの三陸海岸は宮崎県も岩手県もない、津波の被害が一番ひどい地帯だ。

・まず訪れたのが陸前高田市。

ここも3階まで達する津波で市街地があっという間に消え失せたところ。市役所、市民会館、市民体育館など市民が避難所として逃げ込んだ建物は、30mにも達する津波に襲われ、ほとんどの人が犠牲になったという。

中が空洞と化したそれらの建物が今も建っている。



大勢の方が犠牲になった市民体育館







・鉄道・大船渡線越前高田駅があったと思われる場所から北側に整然と市街道路が張り巡らされていて、いくつもの交差点を右に左にと市街地を走ってみた。とはいっても、いたるところに瓦礫があったり、陥没していたりで行き止まりになっていて、迷路のような市街地を脱出するのに苦労した。その道の両側には土台だけで家が全くない。商店の無い市街道路を走るという実に異様な気分を味わった。



・石巻市で三重から来ているボランティアのおばさんに「高田高校はぜひ見ておいて」と言われていたが、同じような被災家屋ばかりだし、土地勘も無いので寄ることなく陸前高田市を離れ大船渡市へと向かった。帰宅後、高田高校の資料をいろいろ調べ、テレビ報道にもたびたび出てくるので、やはり寄っておくべきだったと後悔している。

・今日は三陸でも東日本大震災の津波被害が最も大きかった地域を回った。どこでも共通していることは、もう1年半も経つのに、どこも津波で流されたままの状態が残っていること。跡はきれいに整理されているが、土台がそのままそこに草が生えているだけ。整理された瓦礫がいたるところに積み上げられていることだ。国、県、市町村の行政はどうしようとしているのだろうか？

・今日も一日同じような惨状を見ながら石巻市から大船渡市まで走った。とにかく疲れる。

道の駅「さんりく」に辿り着いたところで今日の行動を終了した。